北　海　道　開　発　局　か　ら　の　お　知　ら　せ

国土交通省 北海道開発局
共に北海道の未来を創る 第9期北海道総合開発計画

地域づくり交流会in帯広

高校生たちの探究学習～地域の未来づくりのために～

北海道開発局は、第9期北海道総合開発計画に基づき、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムとともに「ほっかいどう学」を推進しています。

その一環として、令和8年1月16日、帯広市において、北海道教育委員会の後援と同フォーラムの協力を得て、高校生の探究学習をテーマとした交流会を開催しましたので、その概要をお伝えします。

地方部の人口減少が加速度的に進行する中、北海道の「生産空間」を維持・発展させるためには、地域の若者たちの力が不可欠です。その若者たちが地域に誇りと愛着を持ち、未来を担う意欲を育むためには、私たち地域の大人の関わり方が重要な鍵となります。

本交流会では、高校生の探究学習を地域づくりの原動力としていかに活用するかという視点から、基調講演及びパネルディスカッションを行いました。

また、情報交換・名刺交換タイムを通じて、パネリストと参加者が交流し、各地域における未来づくりの相談・情報交換を行いました。

プログラム

第1部　基調講演

「地域の未来をデザインする十勝からの挑戦」

NPO法人食の絆を育む会　理事長
一般社団法人十勝うらほろ樂舎　創設者
一般社団法人SackOmi　共同創設者COO
株式会社ノースプロダクション　代表取締役会長　近江 正隆　氏

第2部　パネルディスカッション

「高校生と地域で育む探究の未来」

パネリスト
（前掲）　近江 正隆　氏
ＮＰＯ法人ほっかいどう学推進フォーラム　理事長　新保 元康　氏
北海道高等学校遠隔授業配信センター（T-base）次長　佐藤 豊記　氏
国土交通省北海道開発局帯広開発建設部　次長　実重 貴之

ファシリテーター
ＮＰＯ法人ほっかいどう学推進フォーラム　事務局長　宮川 愛由　氏

第3部　情報交換・名刺交換タイム

主催者挨拶

国土交通省北海道開発局
開発監理部開発計画課　開発企画官　大泉　勝裕

北海道総合開発計画では、北海道特有の長い都市間距離の間に介在する広大な農地や自然を、北海道が誇る「食」「観光」「再生可能エネルギー」といった価値を生み出す重要な地域として「生産空間」と定義。こうした価値を「生み出す力」は、その地域で暮らす人々の日々の営みによって支えられており、地域の定住環境維持が最重要課題である。そのためには、開発局によるインフラ整備に加え、医療、通信、交通、そして子育て世代の定住を左右する教育環境の充実が不可欠。質の高い教育の提供は、未来の人材育成と定住促進の双方において極めて重要であり、都市部への流出要因に教育環境が挙げられる現状からも、その必要性は高い。

本交流会は、教育、人材育成、地域づくりの最前線で活躍する専門家を招き、地域の未来を担う若者と、彼らを支える大人たちが、どのように関わり合い、新たな地域の価値を創出できるかを検討する場として開催。本議論を通じ、生産空間の維持における教育の役割について理解を深める機会としたい。

基調講演「地域の未来をデザインする十勝からの挑戦」

NPO法人食の絆を育む会 理事長、一般社団法人十勝うらほろ樂舎 創設者、一般社団法人SackOmi 共同創設者COO、株式会社ノースプロダクション 代表取締役会長 近江 正隆 氏

「地域の未来をデザインする十勝からの挑戦」と題し、自身の経歴を振り返りながら、地域づくりの核となる哲学と具体的な実践について講演した。

1. 原点：価値観の転換と「ひとりでは、生きられていなかった」という確信

●ドラマ「北の国から」に憧れ、東京から北海道へ移住。浦幌町で漁師となった。

●90年代後半、インターネット（楽天市場など）で自ら獲った魚介類を販売し、大きな成功を収めた。しかし、その成功の裏で地域との軋轢も感じていた。

●船の転覆事故で死の淵をさまよった際、他の漁師たちに命を救われた。この経験から、「困った時は助け合う」という地域社会の根源的な力に衝撃を受け、「助けてもらった命を地域への恩返しに使いたい」と決意。「ひとりでは、生きられていなかった」という確信が、その後の活動の原点となった。

2. 教育を通じた地域との絆づくり：「うらほろスタイル」
地域の未来は子どもたちが主役であるという考えのもと、学校教育と連携した取組を開始。浦幌町には高校がないため、小中学校の9年間で地域への愛着を育むプログラム「うらほろスタイル」を構築。
●小学5年生が地域の農家などに民泊。都会の高校生を受け入れる「食の絆を育む会」のノウハウを応用し、子どもたちが家族以外の「信じられる他人」と出会う機会を創出。これにより、地域全体が自分を見守ってくれているという安心感と愛着が生まれる。
●中学3年生が「地域がもっと元気になるために」というテーマで探究学習を行い、町長や役場職員、町民の前で提案を発表。発表されたアイデアは、町の大人たちが月1回のワークショップで真剣に実現方法を議論し、実際に形にしていく。
●これらの活動により子どもたちは自分たちの声が地域を動かすという実感を得て、自己肯定感と郷土愛を深める。

3. Uターンを促す雇用の創出：「十勝うらほろ樂舎」
「うらほろスタイル」の成功により地域に戻りたいと願う若者が増えたが、町には受け皿となる雇用が不足していたことを背景に、若者の「戻りたい」という想いを実現するため、一般社団法人「十勝うらほろ樂舎」を設立。
●Yahoo!やロート製薬などの企業に勤める都市部の専門家が、副業として経営に参加。地域の力だけでは難しい仕事づくりや事業展開を、外部の知見を取り入れながら推進。
●税金に依存せず、事業収益で公益的な活動の財源を賄う「稼ぐ仕組み」の構築を目指す。

4. グローバルな展開：マリ共和国との連携と「子ども未来絵プロジェクト」
浦幌町の取組が予期せず国際的な注目を集めることとなったことを端緒として、新たな取組「子ども未来絵プロジェクト」を始動。
●人口爆発と若者の都市流出に悩む西アフリカのマリ共和国が、若者が自らの意思で農村に戻ってくる「うらほろスタイル」に強い関心を寄せ、研修団が複数回来日。
●浦幌での実践とマリとの交流から、「子どもたちの思いを受け止める」というコンセプトを世界に広げる「子ども未来絵プロジェクト」を始動。子どもたちに「こうなったらいいな」という未来の絵を描いてもらう活動を展開。
・日本での実践：全国8都道府県、約1300人の子どもが参加。自分の夢が大人に受け止められるという体験を提供する。
・マリでの実践：約1000人の子どもが参加。半数近くが武器や戦争反対の絵を描き、言葉には出せない子どもたちの本心が政府関係者に静かな衝撃を与えた。
●2026年までに10万枚の絵を集めることを目指す。子どもたちの絵は、見る大人たちの心を優しくし、「今だけ、自分だけ、ここだけ」という視野から脱却させる力があると確信している。国連開発計画（UNDP）とも連携し、集まった絵はモザイクアートとしてプロジェクトのシンボルとなっている。

パネルディスカッション 「高校生と地域で育む探究の未来」

＜パネリスト＞
（前掲）
近江 正隆 氏
NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム 理事長 新保 元康 氏
北海道高等学校遠隔授業配信センター（T-base） 次長 佐藤 豊記 氏
国土交通省北海道開発局帯広開発建設部 次長 実重 貴之

＜ファシリテーター＞
NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム 事務局長 宮川 愛由 氏

■パネリストの自己紹介及び活動紹介

【新保】 元小学校教員で、現在NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの理事長として、文部科学省や道教委と連携し教育分野の支援に携わっている。北海道の魅力は自然そのものだけでなく、「世界は誰かの仕事でできている」という言葉のとおり、人やインフラ整備など多くの取組によって支えられてきたもの。学校・行政・地域が連携し、教員を主役とした学びを通じて、子どもたちに北海道の価値を伝え、地域と共に未来を創っていくことが重要。

【佐藤】 T-baseは札幌市の有朋高校内に設置され、ICTを活用して1学年1クラスの道立高校（地域連携校）32校に対し、通年で遠隔授業配信を行っている。現在、約950名の生徒を対象に週約295時間の授業を配信し、保健体育・美術を除くほぼ全教科をカバーするとともに、メタバース等の先進的手法にも挑戦している。「生まれた場所に関係なく学びの環境を提供する」という理念のもと、授業の質、教員の意識、受信校との信頼関係を重視した取組を進めている。

【実重】 1987年生まれのいわゆる「プレッシャー世代」。2011年に国土交通省へ入省後、北海道や観光分野を中心に業務に携わり、特にアドベンチャートラベルの推進に関心を寄せてきた。開発局の役割はインフラ整備にとどまらず、食・観光・エネルギーといった北海道のポテンシャルを最大限に生かすことにあると考えている。北海道総合開発計画のビジョンのもと、多様な関係者との「共創」を重視し、教育機関や学生とも連携しながらより良い北海道・日本づくりを目指している。

新保元康氏

佐藤豊紀氏

実重貴之

■「高校生と地域で育む探究の未来」をテーマに議論

① 高校生が地域に誇りと愛着を持つために必要なこととは？

【近江】 家族以外の地域の大人（信じられる他人）に自分の存在や思いを受け止められる経験が、地域に対する愛着形成に繋がる。

【佐藤】 有珠山噴火当時に勤務した小規模校で、地域の大人と生徒が「運命共同体」として困難を乗り越える中で、強い関係性が築かれた経験がある。こうした地域との関わりが、生徒の愛着や誇りを育み、卒業後も地域に関わり続ける力に繋がるのではないか。

【新保】 地域への愛着は年代を問わず形成されるが、特に幼少期から高校までの体験がその後の価値観に大きな影響を与える。若い時期にどのような体験や出会いがあったかが、将来の地域への関わりや行動を左右する重要な要素である。

【近江】 浦幌町では、子どもが自ら町の魅力を発信する体験を通じて、地域への愛着と主体性が育まれている。こうした取組は「やらされ感」がなく、地域の課題を自分事として考える力につながっている。その結果、進路やキャリア意識にも影響し、将来的な地域回帰や貢献への動機形成につながっている。

【実重】 大人が子どもに対し、遊び心を持って地域の自然や産業に触れさせることが大切。子どもの中に生まれた「興味」が「問い」を生み、「問い」が「思考」を生み、「思考」が「愛着」を生む。

●参加者からの質問

愛着に関して、うらほろスタイルを受けた子どもたちの愛着の対象範囲はどうなっているのか。浦幌町までなのか、十勝まで広がっているのか、あるいは北海道全体に、その愛着を持っているのか。

⇒**【近江】** 中学までは主に「町内（浦幌）」に愛着が形成されると考えられる。ただし、身につけた姿勢や感覚は、進学・就職先など新たな生活圏にも愛着を広げていく。

② 地域の大人にはどのような関わり方が求められるのか？

【新保】 地域の大人には、人口減少や生産年齢人口の縮小といった現実を正しく知り「危機感」を持つことが求められる。その上で、世代・立場を越えて協力し合い、衝突を恐れず「本気・本音」で関わる姿勢が重要。地域を深く愛し、その危機と可能性を理解した大人の本気の関与が、子どもへの影響力を高める。

【実重】 大人は、自然・文化・産業といった地域資源に、遊び心をもって子どもを触れさせる役割を担う。例えば、凍った川の氷を割ってみるといった単純な遊びが、興味や「なぜ？」という問いを生み、思考を促す。こうした体感的な経験の積み重ねが地域への愛着や主体的な学びに繋がる。

【佐藤】 探究学習において大人は、子どもを対等なパートナーとして捉え、本音で語る姿勢が重要。人口減少や経済課題など厳しい現実も隠さず伝えた上で、未来を共に考える関係性が求められる。地域への本当の愛着と覚悟を持つ大人の言葉こそが、子どもに信頼感を与える。

【近江】 子どもの思いを大人が受け止めることで、大人自身の地域に対する意識も「子どものために」と前向きに変化する。

●参加者からの質問

地域の大人が高校生の探究学習に関わる上では、大人自身が地域への誇りや愛着を持っていることが非常に大事だが、一方で大人の意識変容というのは難しいと思う。特に、その地域に長く住む大人の意識変容を促すには、どのようなアプローチが効果的か。

⇒**【実重】** 高い専門性を持つ外部人材が地域を訪れ、一次産業を尊敬し、学ぶ体験は、地域の誇りを育てる。「うらほろアカデメイア」(注)のように、第一線の人々が対等に関わる場が、地域の価値を可視化する。地域の強みを見極め、意識の高い来訪者と繋がる仕組みが、大人の意識変容に繋がる。

【近江】 課題だらけでも眉間にしわを寄せず、「楽しい」姿勢で向き合うこと自体が、次の世代に伝えたい学びとなる。子どもたちを受け止めた瞬間に大人の見方が変わり、地域や自分たちの価値を肯定的に捉え直すようになる。

【新保】 「子どもたちのために」というキーワードを入れることで、大人が合意し、考え方や意識が動き出す場面を学校現場で実感してきた。学校は社会全体を動かすきっかけになり得るが、先生任せにせず、地域みんなで一緒に取り組むことが大切。

【佐藤】 地域の子どもたちは大人たちの希望であり、子どもたちが変わっていくことで大人もまた変容していく。子どもの意見をきっかけに家庭や学校で「じゃあどうする？」と話し合うことが、地域全体を動かす力になる。

(注)十勝うらほろ樂舎が主催する、企業人やアスリートなどが地域の一次産業や自然の中での体験・対話を通じ、自分の仕事や生き方を再定義するための人材育成プログラム。

③ 探究の未来に向けてチャレンジしたいこと

【近江】 「地域の未来」ではなく、まずは子ども一人ひとりの「自分の未来」を描き、その思いを大人が評価せずに受け止め続けることを出発点とする。2026年に子どもの夢を描いた絵を10万枚集め、大人がその想いを受け止める「子ども未来絵プロジェクト」を推進し、社会の基盤（インフラ）とすることを目指している。

【新保】 学校と先生を「日常」から応援し、学習指導要領の変わり目（2030年）をチャンスとして教育を変えていく。「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」を軸に、柔軟な教育課程で地域の学びを位置づける。生成AI時代だからこそ、本気の大人が子どもに寄り添って支えることがますます大事になってくる。

【佐藤】 総合的な探究の時間は、高校の中で先生方と生徒が一生懸命つくっており、新しいものは急には入らない。その中で、地域や大人たちが先生方を助け、地域の子どもたちを一緒に支えようという思いを受け止め合うことが、学校現場のプラスになる。

【実重】 探究学習の現場に対して、地域の成り立ちなども含めたインフラにとどまらない課題の現場を提供すること、多様な主体と学校との橋渡しを行う地域ネットワークのハブ機能を果たすこと、生徒たちのアウトプットを受け止めることを考えていきたい。

宮川愛由氏

【宮川】 皆さんのお話を伺っていて、心に残ったのはやはり“本気”や“本音”という言葉。大人が本気で地域を良くしたいと願って動けば、その思いは必ず子どもたちにも伝わっていくはず。でもそれは、“子どもに教える”という上から目線ではなく、大人も一緒になって学ぶことが大切。子どもたちからのフィードバックによって、大人が気づいていなかったことを教わることもある。大人でもまだ体験したことのないことがたくさんある中で、一緒に探究に取り組むことで、大人も子どもも共に地域の未来をつくっていける。そんな良い循環が生まれればいいなと、改めて感じた。

■交流会全体のまとめ

1. 地域愛着の醸成は「信頼できる地域の大人」との関係性から生まれる
若者が地域に誇りと愛着を持つための根幹は、家族以外の「信じられる他人」である地域住民に受け入れられ、気にかけられているという実感である。この実感が、個人の自己肯定感を育むと同時に、地域全体への帰属意識へと発展する。

2.「うらほろスタイル」は地域一体型教育の成功モデル
近江氏が立ち上げた浦幌町の小中学校での9年間の教育プログラム「うらほろスタイル」は、子どもたちが地域への愛着を深め、将来的に地元へUターンしたいと考えるようになる具体的な道筋を示した。地域でのホームステイ体験や、町の未来を考える提案活動が、子どもたちの当事者意識を効果的に引き出している。

3. 地域価値の「外的評価」と大人の「ロールモデル」が若者の誇りを育む
子どもたちが自分たちの地域を客観的に価値あるものと認識するためには、外部からの評価が有効。また、地域での生活や仕事を心から楽しんでいる大人の姿が、子どもたちにとって魅力的なロールモデルとなり、「この地域で暮らしたい」という動機付けに繋がる。

4. 子どもたちの視点を尊重することが、地域と社会を変える力を持つ
近江氏が提唱する「子ども未来絵プロジェクト」は、子どもたちが描く未来の絵を社会全体で受け止める試みである。この活動は、子どもたちに「受け止められた」という感覚を与えるだけでなく、その純粋な視点が大人たちの意識を変革し、より良い社会を築くための触媒となり得る可能性を秘めている。

閉会挨拶

国土交通省北海道開発局帯広開発建設部長　空閑　健

パネリストの皆さんの熱い議論を受け、教育の現場と開発局という組織運営には共通点があると気づかされた。特に若手職員が減少する中で、自らの仕事に「誇り」や「やりがい」をいかに持ってもらうかに対しては、地域の大人に当たる我々幹部管理職員の向き合い方が大事であり、「大人（管理職員）が元気で、楽しく、本気で働いている姿を見せているか」が、地域づくりにおいても組織運営においても、次世代を育てる鍵であることを改めて認識した。

十勝は民間が切り拓いてきた地域であり、現在も宇宙・ロケット事業、AI農業、自動運転、バイオマス発電など、全国をリードする多様なチャレンジが行われている。これらの先進的な取組を支える根幹は「人」であり、地域づくりは人づくりに帰結するということも、併せて再認識した次第。

今回の交流会を一つのきっかけとし、若い人たちが地域づくりに主体的に関与し、誇りを持てる北海道・十勝を共に創り上げていくことを期待したい。

情報交換・名刺交換タイム

最後に、登壇者を含む参加者の皆様が相互に交流するための時間を設けました。
本交流会をきっかけとして、新たな「つながり」や「ひろがり」が生まれることを期待して、閉会しました。

北海道開発局では、今後とも、若い人たちに生まれ育った地域への誇りと愛着を持ってもらうことを目指して、小中高生の探究活動を支援する取組を進めます！